

# 死ぬまで知識欲を持ち続け、 それを社会還元したいです

齋尾 恭子

愛国学園短期大学特任教授

## <仕事の内容とやりがい>

就職後数年は分析研究室で、無機金属イオン分画を試みました。その間に分析基礎技術が身につきました。東京大学生物化学研に内地留学、国際稲研究所(IRRI)での研究で、当時では新しい研究に移り、帰国後、農水省の研究所で大豆蛋白質研究に熱中しました。大豆の主蛋白質7Sと11Sが、構造や反応性が異なり、大豆加工食品の物性に大きな違いを与える事実は私の発見です。大豆については、当時米国から導入の顆粒状、組織状蛋白食品の日本産業や市場への普及のための研究的、行政的アプローチも致しました。

## <進路決定のきっかけ>

子供の時から何か未知のものを探るといふ科学の世界に憧れました。専攻では生物化学を選びました。昭和10年の私の大学卒業当時は、男子校に女子の求人は皆無で、国家公務員上級職試験を受けてどこか研究所で働くことを希望しました。しかし、合格しても採用の省の面接で全く相手にしてもらえず、無給でも研究できる所を探しました。その年の12月末、幾人かの男子決定者が報酬の良い民間企業に移り、合格者がいなくなり、再度の電話と再度の面接で、農林水産省食品総合研究所に採用されました。

研究所での仕事は、優れた上司にも恵まれ、叱られても、失敗をしても楽しかったです。25歳の時に結婚しましたが、子供を持つ気持ちの余裕が出来たのは30歳でした。心身共に、丈夫な娘であったのが仕事を続けられた幸せですが、「いつまで続く泥沼ぞ」という綱渡りの生活と研究の両立であったと思います。一時身体を壊し、夫の自宅近くに住み、義母に昼間見てもらえるようになりましたので、出張やその後の海外留学も可能となり、それなりの苦労はあったものの感謝しています。

最終的に一生の仕事の場が決まるには、私は何か運命のようなものがあると思えてなりません。そして選択してからも、幾つかの岐路に出会うことがあります。その度に自分は一番何をしたいのか。を考えて進みます。その選択にも研究の内容や環境のようなこともあります。私の時代には、責任ある地位を女性に依頼されることが少なかった時代ですので、仕事の虫になりました。自分を抑えて、管理職や研究プロジェクトの長、国際会議の実行委員長などを引き受けました。

## <仕事と家庭のバランス>

## <進路選択に対してのメッセージ>

### <プロフィール>



千葉大学農芸化学科卒業。農水省食品総合研究所部長、農林水産技術会議事務局研究開発官、農水省農業研究センター次長等。東京都立食品技術センター所長、国際熱帯農業研究所(IITA)理事。JICAシニア海外ボランティアでカンボジア王立農業大学(2年半)、同大学で個人的に教育支援継続。5回エチオピアにて農村指導員の教育支援。愛国学園短期大学非常勤講師、特任教授。シニアボランティア経験を活かす会会員。農学博士、日本女性科学者の会名誉会員、名誉フードスペシャリスト